

[島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要 Vol. 55 11~20 (2016)]

## 「六日の菖蒲」考—絵姿女房と嫁ヶ淵伝説

山村 桃子  
(総合文化学科)

A study on legend of ITO “Acorus calamus of May 6”

Momoko YAMAMURA

キーワード：絵姿女房、菖蒲

The Wife in a Portrait, Acorus calamus

### 1. はじめに

島根県松江市東出雲町には、「六日の菖蒲」(または「大江美人」)の伝説が残る。本譚は『島根県口碑伝説集』<sup>1)</sup>(1927)、『意東村誌』<sup>2)</sup>(1948)、『東出雲町夜話』<sup>3)</sup>(1971)、『東出雲町誌』<sup>4)</sup>(1978)に採録されており、ここでは最も古い口碑伝説集の本文を挙げる。

八東郡意東村字下意東、意東川の東方田圃中旧国道側に一つの塚があって楡の老樹の下苔蒸した五輪の石塔がある。土地の人は「美人塚」とも「五輪様」とも云って居る。塚の主大江の美人は同村字大江に生れた。天成の麗質を朝夕に庭前の稚子が池で沐浴した。美は愈よ美をました。妙齡となって、上意東字古畑から婿を取つて、琴瑟相和し、其濃かな情合は人々を羨望艶殺せしめた。新婚間もなき婿は片時も妻の美貌と愛を離れることが出来なかつた。けれども耕作に野良へ出るには妻を伴うことが出来なかつた。そこで絵師に囑して愛妻の絵姿を描かせ、之を竹頭に挟んで自分の耕作する田畑に樹ててに纔に慰めて居た。

或る時例の如く野に出て居ると突然大旋風が起つた。愛妻の絵姿は忽ち飛上つた。驚いて取らうとする間ヒラリヒラリと絵姿は大空高く舞上つて、山を越え、海を越えて遠く遠く飄として遂に都の空に飛んで雲深き九重の内裏に落ちた。

美人多き内裏でもかほどの美人は殆ど無かつた。驚異の眼は輝いた。斯かる美人あらば召して内裏に入れよと仰せは全国に下つた。捜査の手は諸国に下つた。間もなく大江の美人は大宮に召された。

あとに残された夫は恋々の情に堪へず、此世の思ひ出に今一目妻の姿を見たいと心を砕いたけれども全く絶望する外は無かつた。端しくも端午の節句に限り菖蒲売のみは嚴重な禁庭にも出入を許さることと聞いた彼れは躍りあがつて喜んだ。大江の菖蒲を切り遙々と京に上つた。けれども交通不便な時代のこととて其の機を失し五月六日にやっと京に着いた。男はせめての心やりに失望落胆の声もあはれに内裏の周囲を「菖蒲々々」と呼びめぐつた。「六日の菖蒲売りとは珍しいことである」と障子に細目を開けて

見たのはかの美人であった。美人は其菖蒲売りが日頃恋しと思ふ夫であることを発見した時狂気に卒倒せんとし。

窃に窓の下に呼びよせ、牒し合はせて、其夜にまきれ二人は手を取って国の方へ急いだ。はかどらぬ女の足、追手の恐怖、山阪の難所、苦しい旅を夜に日について帰国しや々と美人塚の所までついた時、夫は「故郷の大江が見ゆる」と告げると女は俄に張りつめた気がゆるみ、一歩も歩けなくなって遂に死んだ。夫は泣く泣くこゝに埋葬したと云ふ。今でも夫の在所では五月六日に菖蒲を飾り、又大江には美人の屋敷跡あり稚子が池も残って居る。

(『鳥根県口碑伝説集』)

意東村大江に住む美人が古畑の男と結婚する。夫は美しい妻と離れたくないがために、その姿を絵に描かせて耕作中も眺めた。絵は風によって都まで運ばれ、妻は宮中に召される。夫は宮中に入る唯一の機会が端午の節句であることを知り、大江の菖蒲を切り菖蒲売となる。辿り着いた五月六日、男が内裏の周囲を「菖蒲々々」と売り歩くのを、六日の菖蒲とは珍しいと窺った妻は、夫であることに気づく。夜闇に紛れ二人は故郷に逃亡するが、大江を前にして妻は亡くなった。夫はそこに妻を埋葬し、美人塚となる。夫の村では今も五月六日に菖蒲を飾り、大江には美人の屋敷跡と、美人が沐浴した稚子が池が残るという。

この民話は、美しい嫁の姿が絵に描かれることを発端として殿様との葛藤がもたらされる、絵姿女房譚(AT465)の一つである。絵姿女房譚の梗概は次の通りである。

ある若者が美しい女を得る。嫁の顔ばかり眺めていて仕事にいけないので、絵姿を描いて持たせてやる。風で絵姿が吹き飛ばされ、殿様の屋敷に落ちて嫁を奪われる。三年後に男は物売り(桃売り・柿売り・栗売り・焙烙売り)の姿になって、殿様の屋敷に入る。それまで一度も笑わなかった女が、物売りの姿を見てはじめて笑っ

たので、殿様はとても喜び、物売りと服を交換する。物売りの汚い服を着た殿様は最後には門番に追い出されてしまい、二人は殿様の屋敷で幸せに暮らす。この物売り型とは別に難題型があり、そこで殿様が吹き飛ばされてきた絵姿を見て、女を召し上げようと難題を出すのが、嫁の才知でみごとに解決する<sup>5)</sup>。

絵姿女房譚にはこのような物売型と難題型に加え、相撲型(難題の代わりに殿様が大男、若者が嫁の助言で爺を連れてきて相撲を取らせ、爺が勝つ。嫁と爺は神の化身)もある。また関敬吾氏は、難題求婚型、物売型、複合型、笑わぬ女房型、髪長姫型の五つの型に分類する<sup>6)</sup>。

本譚の男は菖蒲売に変装するため、このタイプの中では物売型に属する。しかし、物売型の主要な要素である殿様との衣服の取り替えはなく、夫婦は逃亡して故郷に還る。本譚と典型的な絵姿女房が異なるのは、女房が最後に亡くなること、そして五月六日と菖蒲との関わりという要素である。本稿ではこのふたつの点に着目し、「六日の菖蒲」の伝説の性格について、古典文学との関わりとともに考察する。

## 2. 女房の性格

譚の舞台となる意東は、現在の松江市東出雲町の上意東・下意東地域である。中海に面する側が下意東、安来市広瀬町に面し京羅木山麓<sup>きやうらぎ</sup>の丘陵に位置するのが上意東である。星上山を水源とする意東川が中海に注ぎ、谷間に田地を形成する。

意東という地名は、『倭名類聚抄』にみられる出雲国意宇郡筑陽郷が再編成され、意東郷、揖屋郷に分かれてできたとみられ、吉田東伍『大日本地名辞書』は、意東の意は揖屋の揖、その揖屋の東を意味するとする<sup>7)</sup>。揖屋は『日本書紀』にも見える古い地名である。意東は鎌倉時代には京都賀茂御祖神社に寄進され、意東庄(筑陽庄)と呼ばれた<sup>8)</sup>。江戸初期には上意東村と下意東村に分けられている<sup>9)</sup>。1889(明治2)年に意宇郡意東村が成立し、1896(明治29)年には八東郡に属した。さらに、1954(昭和29)年には東出雲町に属し、2011年には松江

市に編入され松江市東出雲町上意東・下意東となっている。

女房の家について、テキスト間では「意東村字大江」（『島根県口碑伝説集』）、「現在でも東出雲町の一番南になる上意東本谷奥に桑原という戸数三戸の小部落があり、そこに大江という地名が残っているが、この美人の生まれた所はそこであると故老は伝えている」（『東出雲町夜話』）、「桑原の大江の地は町の奥部標高300メートルはあろう」（『東出雲町誌』）とあることから、上意東本谷の奥部にある桑原大江の地であったことがわかる。上意東でも京羅木山麓の山深い地域である。

そこには「稚児が池」があったとされ、美人がそこで産湯を使った、もしくは沐浴したと伝承される。ここで沐浴の要素に注目したい。絵姿女房の沐浴は、次の紫波郡の絵姿女房譚にもみられる。

若者が水浴びをしている天女の羽衣を一枚隠す。二人は天に昇る。一人の天女を女房にする。男は毎日女房の顔ばかり見て暮らす。女房は自分の姿を描いて持たせ働きに行かせる。

（日本昔話大成2「絵姿女房」岩手県紫波郡<sup>10)</sup>）

上記の絵姿女房は、はじめ天人女房としてあらわれる。天人女房譚の導入部では、次の用例のように、複数の天女が木に衣をかけ沐浴をすることが多い。また丹後国風土記逸文にもみられるように、それは神話に共通する表現でもある。

二、三人の天女が池で水浴びしている。獵夫が一枚の着物を持ち帰る。天女の一人は帰ることができないで羽衣を探しに来てその家の嫁になる。（大成2「天人女房」広島県比婆郡）この井に天つ女八人降り降り来て浴水かほみむ。時に老夫婦あり。…この老かるこの井に至り、窃ひそかに天つ女一人の衣と裳を取蔵しつ。即ち衣と裳あるは皆天に飛び上がり、ただ衣も裳もなき女娘一人留まりぬ。（丹後国風土記逸文）

女が沐浴するという要素は、天女であることを示

すひとつの表現であるだろう。従って、「稚児が池」とのかかわりをもつ本譚の女房は天女に対応する資質を有することが窺える。

物売型の女房にはこのような神性をもつ者は少なく、本譚の女房のあり方はむしろ難題型の女房の性格に近い。『日本昔話大成』（以下「大成」）に収録された絵姿女房難題型をみれば、竜宮女房（4）、氏神（2）、神明様・天のお日様の娘（2）、天人女房（1）と異類女房が散見される。中でも竜宮女房が多く、また日とのかかわりも特徴的であることから、女房が水や太陽とのつながりを有していることが推測される。天人女房とは地上に富をもたらず存在である。絵姿女房難題型においても致富譚がみられることから、女房との結婚は家に富をもたらずことにつながる。さらに氏神という正体は、女房が異類でありながらもある土着性を有していることを示すだろう。

こうした絵姿女房譚の女房の性格に鑑み、「大江」で生まれ「稚児が池」で沐浴する、水辺とのかかわりが深い本譚の女房は、水の神としての性格を有すると考えることができる。

関敬吾氏によれば、絵姿女房譚は、夫との婚姻が幸福に終わるか、破局に終わるかの二つの形式に分かれ、「女性が異族であり、神格がより強い場合は離婚であり、人間的性格が濃厚な場合は幸福な婚姻に終わっている」<sup>11)</sup>とされる。本譚の夫婦が破綻に終わることは、女房の異族性が高いことに起因するといえる。

次に注目したいのは、多く婚姻円満に終わる物売型のなかで、本譚と同様に破綻する例である。

用明天皇が太子のとき美しい女の姿を描いた風が飛んで来る。豊後国の満能長者の一人娘である。太子は賤の男にやつしたいま名も草刈三歳と改めて西国に下り、艱難の後その姫を娶って都に御還りになる途中、大島の瀬戸で姫は竜神に魅入られ乗船がくつがえりかろうじてここに上陸して命が絶えた。追善のためにここに盤若寺を建てる。

（大成2「絵姿女房」山口県室津半島）

糠次郎という貧乏者が長者の娘を嫁にもらう。傍を離れず働きに出ない。女房は自分の姿を描いて竿にはさんで与える。畑に立てて働いていると旋風に飛ばされ奈良の都の内裏に落ちて葛城王の手に入る。皇子は奥州に下りその女房を采女として連れ帰る。糠次郎が妻との別離を悲しんだ所を踏張りの松とっている。采女は宮殿を抜け出て衣を猿沢の池の柳にかけ安積の郡に帰ったが、夫は死んでいるので自分も浅香沼に身を投ずる。奈良では池を替えたが采女の姿はない。安積の沼に采女の亡骸が浮かび上がり、ために両方の水は地下を通うものと伝えている。伝説。(同 福島県郡山市)

これらはいずれも、各土地と結びついた伝説である。前者の竜神に魅入られた姫は、海の神に捧げられた巫女としての性格をもつ。たとえば、次の『古事記』の倭建命の妻・弟橘比売命もまた海の神に捧げられる女性であった。

はしりみずの  
走水海を渡りし時に、其の渡の神、浪を興し、船を廻せば、進み渡ること得ず。爾くして、其の後、名は弟橘比売命、白ししく、「<sup>あれ</sup>妾、御子に易りて、海の中に入らむ。御子は、遣さえし政を遂げ、覆奏すべし」とまをしき。…七日の後に、其の後の御櫛、海辺に依りき。乃ち其の櫛を取り、御陵を作りて、治め置きき。

(『古事記』中巻 景行条)

倭建命の東征中、走水海の渡の神が船の行く手を妨む。弟橘比売命が夫に代わって自ら海に入ると鎮まる。遺体はなく、海辺に寄り着いた櫛だけが残された。女性の海への入水とは、荒ぶる海の神を鎮める供饗の意味をもっていた。

満能長者の娘もまた同様に考えられる。大島瀬戸は、古く『万葉集』にも歌われた瀬戸内航路の難所であった。

大島の鳴門を過ぎて再宿<sup>ふたよ</sup>を経ぬる後に、追ひて作る歌  
これやこの名に負ふ鳴門の渦潮に玉藻刈るとふ  
海人娘ども (『万葉集』巻15・3638)

豊後国の長者の娘が天皇に娶られ、都に向かう途次、竜神に魅入られて船が覆るのは、海神或いは海峽の神に長者の娘が捧げられたことを意味する。

後者の糠次郎の嫁もまた、長者の娘である。後に葛城王の采女となり、故郷の陸奥国安積に戻るが、夫がいないことを嘆き沼に身を投じる。亡骸が見つからなかったことは、次の例と同様である。播磨国の印南地方の女性としてある印南別嬢は、大帯日子命(景行天皇)との婚姻の後に亡くなり、その遺体を捧げて印南川を渡る時、旋風が襲う。

その尸を挙げて印南川を渡る時に、大飄、川下より来て、その尸を川中に纏き入れき。求むれども得ず。但、匣と褶<sup>くしげ ひれ</sup>とを得たり。すなはちこの二物を以てその墓に葬りき。故れ、褶墓<sup>ひれ</sup>と号く。(『播磨国風土記』賀古郡)

亡骸は見つからず、匣と褶<sup>くしげ ひれ</sup>のみが発見される。先の例と併せて、こうした亡骸のない表現は、女性の肉体が神に捧げられたことを意味すると考えられる。

ここには2つのパターンが存在する。航海の際に女性が海の神に捧げられるもの、そして女性が生地の土地の神に捧げられるものである。後者の印南別嬢は、その生地印南の川の神に捧げられ、糠次郎の妻も故郷である浅香沼に身を投じた。満能長者の娘は大島瀬戸に沈んだが、そこは周防灘を隔てて向き合う豊後国と周防国の地理関係の中にあり、娘は故郷の圏域に留められたといえる。女はいずれも都との交渉をもつが、最後にはあるべき場所に還るのである。これらの女性たちが多く、長者、即ちその土地に権力をもつ者の娘であることは、その土地を代表する存在であることを示す。そして神に捧げられることにより、女性は土地の神に仕える巫女となるのである。

本譚の女房は長者の娘とはされないが、「大江には美人の屋敷跡あり」と屋敷に言及されることで、同様の性格を有することが窺える。

女房が故郷大江を目前にして息絶えるのは、既に何者かの墓であった美人塚(下意東)への付会であったと思しい。上意東に端を発する本譚は、下意東に

終わる。本譚は意東の伝説として一貫的に構成され、女房は意東を代表する聖女として語られるのである。

### 3. 物売りと絵姿

絵姿女房譚において、夫が変装する物売りの代表的なものに、桃売・柿売・栗売・焙烙売がある。その他花売、正月の門松売、納豆売、蓮の葉売の場合もある。物売りとはどのような職業か。

『大和物語』148段には、蘆を売る男の話がある。摂津国難波の夫婦は暮向きが悪くなり、男は女に都へ行って宮仕えをさせる。女は貴族の妻になるが、夫のことを忘れられず難波に赴く。蘆を背負った乞食風の男が夫に似ていることに気づくと、女は蘆を買って、食物を与えるよう計らう。男は元妻に気づき、我が身の姿の情けなさに蘆もうち棄て逃げる。男が「君なくてあしかりけりと思ふにもいとど難波の浦ぞすみ憂き」という歌を送ると妻は泣いた。

蘆刈という男の生業は、歌物語の性格に則って、男の歌「難波」「蘆」の歌語、あるいは「あしかり（悪しかり／蘆刈）」から設定されたものと考えられる。「蘆になひたる男のかたるのやうなる姿なる」、「この蘆の男に物など食はせよ」という表現は、蘆刈が乞食に等しい零落した職業であったことを示すだろう。

夫婦が別れ、女は貴人の妻、男は物売りになるというこの話の主筋は、絵姿女房譚と共通するところが多く、絵姿女房が物語や説話といった世界の中で発展した可能性を示唆している。

絵姿女房譚に様々な物売りがある中、これらを含むのは「蓮の葉売」という言葉である。江戸期の文献には「蓮の葉商ひ」「蓮の葉物」という語がみられる。

桃や、柿や、梨の子、これぞ、蓮の葉商ひ、七月十三日の曙、夕暮は麻柯の焼火して、世になき玉を祭る業の、哀れは秋なり。

（『本朝二十不孝』巻5）

蓮の葉物、五月の甲、正月の祝ひ道具は、わづか朔日、二日、三日坊主。

（『世間胸算用』巻1）

「蓮の葉商ひ」とは、元来は盂蘭盆に必要な蓮の葉を売り歩く者の意味であったが、転じて各節供の時期に必要な物売る際商売を指す語となった。季節商売である「蓮の葉売」は、時に乞食に等しい貧しく不安定な商売であっただろう。そう考えた時、絵姿女房譚における基本的な結末の形である物売と殿様との交替は、最も著しい身分差をもつ者の立場逆転の意義をもつといえる。

蓮の葉売りが禁裏様になって日本一美しい女を妻にするという初夢を見る。ある村で泊まった家の聲になる夢を見る。これが正夢になる。女房になった初霜は美しい女。絵姿を畑に持って行くが風で飛ばされる。禁裏様の庭に落ちたために探し出されて后にされる。しかし一度も笑顔を見せない。ある日、やって来た蓮の葉売りを見てはじめて笑う。禁裏様は蓮の葉売りと着物を交換する。近寄ると無礼者といわれ城から追い出される。

（大成2「絵姿女房」福島県南会津郡）

「蓮の葉売りが禁裏様になって日本一美しい女を妻にする」という夢とは、この世に決して起こる可能性の少ない、非現実の極地である。しかし、話においてそれを可能にさせるのが「絵姿」である。絵姿とはここで、土地に留まるべき者を攫い、或いは身分差を乗り越える、越境の記号である。

古来、絵姿とはどのような力をもつと考えられたのだろうか。『万葉集』防人歌には次の歌がみられる。

我が妻も絵に描き取らむ暇もが旅行く我は見つ  
つ偲はむ （『万葉集』巻20・4327）

天平勝宝7（755）年、西国の警備を担う防人の命を受け、遠江から難波へと出立する男が詠んだ歌であり、妻を絵姿に描く時間でもあればよい、旅中それを見て妻を偲ほうと歌う。妻の姿を絵姿にして離れた地での慰めとしたことは、このように古代からあった。またここには慰めのみならず、妻の絵姿

によって旅の夫を守るという呪術的な要素も感じられる。

関敬吾氏は、絵姿について「あるものの本性がその絵の中に移行するという原始的観念にもとづくもので、ものの本質と映像とが同一であり、したがって、ある人間の像を所有する者は、その本人をも支配し得るといふ信仰である」<sup>12)</sup>とされた。絵が本体の実質を写し取るものであるという呪術的信仰が、こうした絵にまつわる譚を形成している。

さらに中国に文献を遡れば、『西京雜記』に記される、和親政策のために匈奴の単于に嫁ぎ子を設けた王昭君の話がある。当時宮廷では妃が似顔絵師に賄賂を送り美しく似顔絵を描いてもらうことがまかり通っていたが、王昭君はそれを拒んだため醜く描かれた。それを見た皇帝が匈奴に嫁がせることを決めるが、出立前に姿を見てその美貌に驚く。しかし約束を反故にできなかつたため、やむを得ず嫁がせたという。絵姿が正しく描かれなかつたことにより、権力者に娶られることなかつたというこの譚の筋は、絵師によって妻の絵が克明に描かれたことによって殿様に娶られるという絵姿女房の裏返しである。

そうした呪的な絵姿は、絵姿女房譚においては、風に飛ばされることによって女房を本来とかげ離れた運命に導く。絵姿女房譚(物売型)における女房と男は、ともに思いがけない運命を手に入れる存在として対応的である。

〈女房〉 田舎の女房 — 都の殿様婦人  
 〈夫〉 蓮の葉売 — 殿様

「絵姿」が担いもつ越境性は、結果的に女房、夫の身分ともに作用する。しかし、より正確に言えば、夫の思いがけない幸運は、女房の美貌によつてもたらされている。「美人多き内裏でもかほどの美人は殆ど無かつた」と語られるほどの女房の卓越した美は、女房のもつ神秘性と特別な力を示唆している。

こうした女房のあり方は、絵姿女房譚に各亜型ある中、難題型や相撲型にみられる女房のそれに最もよく実現される。元來神事であった相撲がみられる型においても、女房が連れてきた神の化身である爺

によって勝利がもたらされる。また「焼き縄三足」や「たたかぬ太鼓の鳴る太鼓」といった殿様の難題を解決する女房は、人間を超越した神性をもつといえよう。多くの昔話や物語において美貌が常ならぬ物のしるしであることに鑑みれば、卓越した美によつて夫を思いがけない幸運に導くという絵姿女房譚は、本来はこうした難題を知恵や相撲によつて解決する女房のあり方を原型として発展したものと考えられるのではないだろうか。

前節で挙げたように、女房の正体が明かされる場合、それは竜宮女房や天や日の娘、氏神の化身であった。人間と神の婚姻は破綻に終わる。そうした本来の神性をもつ妻は、やがて美貌のみが抽出されて人間へと変貌していく。それに伴つて難題解決のモチーフは失われ、物売りへと交替する。物売りに扮した夫の努力により、夫の栄華及び美しい妻との幸福な婚姻が獲得されるのである。

本来は主であったと思われる女房の難題解決能力と、その神性の表象であった美貌は、次のようにそれぞれが分離されて語られる場合もある。

親棄山型。孝行息子が縁の下に親を隠しておく。息子が神様から嫁を授かる。殿様がその嫁をやるか灰縄千尋、打たぬ太鼓の鳴る太鼓、ひゅうひゅう笛の袖かぶりを持って来いと命ずる。息子は婆の助言で難題を果たしほめられる。

(大成2「絵姿女房」新潟県見附市)

美しい妻と知恵を授ける婆(男の母)というように、ふたつの要素が各女性に分化される。岩手県二戸郡にも婆の知恵によつて難題を解決する同様の話が載る。どちらも親棄山との複合型であり、絵姿女房難題型の発展形と考えられるだろう。

#### 4. 六日の菖蒲

菖蒲売(五月五日)、蓮の葉売(八月一五日)、門松売(一月一日)、桃売(三月三日)、などは、すべて節供・盆用の品物を売り歩く「蓮の葉商い」であった。その節供の中でも特に五月節供とは関連が深いことが窺え、殿様が年に一度だけ開城するのが五月節供の日であるという例が複数ある。

一年に只の一日だけ、数多の菖蒲売の中から、初の三人を宮中に呼び入れて、国王親ら其菖蒲を買上げる習はしがあることを知って、菖蒲売になって夜明け前から御門の外に待って居て、呼入れられて御殿の前へ出た。

（『定本柳田国男集 8』「桃太郎の誕生」<sup>13)</sup>）  
嫁が絵に描いて仕事にやると木にかけている間に風に飛ばされ、京の公方様の庭に落ちる。公方はその女を探して嫁にする。ずべっこは一度逢いたいと思ひ、五月の節供に花売りになって行く。（大成 2 「絵姿女房」新潟県見附市）  
風で絵が飛び殿様の屋敷に落ちる。女房は城に連れて行かれる。五月節句は城の中を町人や百姓に見せる日。（同 新潟県見附市）

端午節句は、重数節日によって、三月三日の上巳節供と同様に 3 世紀中葉頃に成立したといわれる。唐代、屈原が汨羅の淵に身を投じたことを悼み、祭り、厄を祓ったことが起源という<sup>14)</sup>。こうして端午節供と供犠、禊祓、水神とのかかわりは、古くは中国に淵源をもつ。そして蓬や菖蒲によって邪気を祓うことは、中国及び日本において、次のようにおこなわれた。

五月五日、之を浴蘭節と謂う。四民並びに鬪百草の戯あり。艾を採りて人を為り、門戸の上に懸け、以て毒気を禳う。菖蒲を以て、或いは鏤み或いは屑とし以て酒に泛ぶ。

（『荆楚歳時記』<sup>15)</sup> 5 月）

五月にもなりぬ。わが家にとまれる人のもとより、「おはしまさずとも、菖蒲ふかではゆゆしからむを、いかがせむずる」といひたり。

（『蜻蛉日記』中巻 天禄 2 年 5 月）

五月と菖蒲の習俗は日本において受容され、宮廷に取り込まれ、あるいは民間に広まった。

「菖蒲」の読みには、ショウブとアヤメの二つがあるが、前者はサトイモ科、後者はアヤメ科の植物で異なる。いずれも剣状の葉をもつが、香気をもち邪気を払うとされたのはショウブである。アヤメ

(*Iris sanguinea*) が山野に自生し、初夏にはカキツバタ (*Iris laevigata*) に似た紫や白の花を咲かせるのに対し、ショウブ (*Acorus calamus*) は湿地や池、川に自生して、初夏に蒲の形態に似た円柱形の淡黄色の花穂をつける。『日葡辞書』<sup>16)</sup> には「XŌ bu. シャップ (菖蒲) このように呼ばれる、泉の中に生ずる草」とある。

そして「六日の菖蒲」とは、次のように中世頃から文献にみられる表現である。

「西国はみな九郎大夫判官にせめおとされぬ、いまはなんのようにか逢ふべき。会にあはぬ花、六日の菖蒲、いさかひはてのちぎりきかな」とぞわらひける。

（『平家物語』 巻第11 志度合戦）

ここでは「会（法会）にあはぬ花」と並び、時宜を逸したことの喩えとしてあり、他の同種の表現に「十日の菊」がある。『和英語林集成』（第 3 版）<sup>17)</sup> には「muika no SHŌBU (prov.)」と諺として挙げられ、やはりショウブと読む。

こうした表現がある一方で、本譚では「今でも夫の在所では五月六日に菖蒲を飾り」と語られるように、五月六日に菖蒲を飾ることは実際の意東の習俗としてあったと思しい。

五月六日ではないものの、端午の節句あたりの日に菖蒲を茸く例は山陰でもみられる。鎌田久子氏によれば、鳥根県仁多郡では五月四日には菖蒲・茅・蓬を組み合わせて軒にさし、この菖蒲が軒から落ちない間は女が驕るといって、わざと速く落ちるようにさすという。また、鳥取県東伯郡赤碕町上中村でも、同日は「女の家」と言い、一晩女だけで御馳走をしたという<sup>18)</sup>。

五月五日のことを「女の家」あるいは「女の屋根」と呼ぶことは、文献においても確かめられる。

誰が世に許し定めけん、五月五日の一夜さを、女の家といふぞかし。身の祝ひ月、祝ひ日に、何事なかれ  
（『女殺油地獄』）

「身の祝ひ月・祝い日」というように、「女の家」は女性にとって特別な日であった。田植の担い手である女性は、田の神の奉仕者として、田植に先立ち菖蒲の屋根の下で忌み籠りをしたと考えられている。

ここで注目したいのは、意東においても、これに関係すると思しい習俗が『意東村誌』の「五月節句のかざり」に載ることである。

女の子が生まれた家の戸口へ、材木等の障害物を積んで、交通妨害をする。これを「かざり」という。これは男子の節供にあたり、女兒を卑しむ陋習の名残で、近時は廃止した。(明治三十年頃迄行われた) (『意東村誌』)

「かざり」と呼ばれる材木等が障害物として家の戸口に置かれたことは、五月節供の日に女子を家の外に出させないことを意味する。ここでは「女兒を卑しむ陋習」と解釈されるが、元来それは五月節供の日における女子の忌み籠りのためのものであったのではないか。五月節供は、田植に先立つ女子の忌み籠りの習俗から、武家社会によって男児の成長を祝うものへと変化したとされる。意東の「かざり」の習俗は、田植と結びついた五月節供の面影をとどめるのではないだろうか。

そのように考えたとき、本譚の「稚児が池」は、「嫁ヶ淵」伝説との重なりを帯びる。柳田国男は、「田植は一年の農事の中でもことにめでたく花やかなるものであるのにこれに伴うて何ゆえにしばしば若い女の死を説くのであろうか」と提起し、女(嫁)が田植の日に死ぬこと、嫁の話の伝わるころが水辺に多いことをふまえて、「田植はすなわち田の神の誕生であり、それを期するためには主要なる原因として、日の神と水の神との和合を必要としたのである。水の神は女性であって、ヨメの装いをして清き水の辺から出現した」とした。嫁が身を投げた場所を「嫁ヶ淵」といい、また田の中にある斎塚を「嫁塚」といった例もあるという。嫁ヶ淵の譚として、次の『飛驒国中案内』<sup>19)</sup>の話を挙げる。

当村に【娶ヶ淵】とて大川に大きな淵有り、昔

当村の農人一人の男子を持、漸く人と成しゆへ、似合敷娶一人はしく思ひ、常々心懸け願ふ所に、何国よりも不知、二九の頃にてにくからぬ娘一人忽然と来る、日も漸く晩景に及び一夜宿借し給はれと頼しゆへ、一宿為致候所に、一日・二日逗留いたし度の由を申て、一七日も居候所に、殊の外に気達も能く、物毎かいかい敷、夫婦のもの思ふ様、彼年頃成る娘一人娶にほしく候故、永くも此所に居申か尋て見はよと心見候へは、娶にもならは居へき由を申に付、留置候、誠に龍神の化身にや有けん、夫より家富み栄ける所に、如何なる事や有やらん、彼娶、家近き川の淵へ大蛇と成て飛入失にけり、所は則、家の下も十間余行て、道より上へ道脇に平岩一つ有之、此岩の上に三歳計りの小児の足跡程なる足跡二つ今に慥に有之候、是より岸奥の娶ヶ淵と申とかや、 (『飛驒国中案内』岸奥村)

農家の男のもとに訪れた女性が嫁となり、家が富み栄える。しかし「龍神の化身にや有けん」、大蛇となり川淵に飛び込んで消える。

この「嫁ヶ淵」の伝承は、本譚から絵姿女房の要素を除いた部分、即ち男の嫁となった女が「六日の菖蒲」が象徴的に告げる田植頃に亡くなるという部分と筋を同じくする。

近くの岩に幼児の足跡が残されることは、本譚の女が「稚児が池」という名の池で沐浴し、あるいは産湯としたことに対応する。それは、産湯に立ちあい、子を産み育てる母という、母と子との呪術的に結ばれた関係によるものだろう。

龍神や大蛇は、水の神としての性格をもつ。1節で述べたように、水辺との関わりが深い本譚の女房にも、水の神としての性質が窺えた。女房の生地である「本谷」や「大江」はともに水辺に関わる地名であり、夫の家「古畑」よりも奥深い谷間の地であった。京羅木山を水源とする意東川の上流部であるそこで、水の神は誕生した。本譚は絵姿女房の話型に抛りつつ、一方で嫁ヶ淵の伝説を主軸としているのである。

意東の主産業は農業であり、今なお田園風景が広

がる。そうした地域にあって語られるこの女房は、五月の田植の頃、田の神の誕生を導く水の神としての女性と考えることができるだろう。

## 5. おわりに

絵姿女房譚の中でも、本譚独自の五月六日と菖蒲との関連は、「今でも夫の在所では五月六日に菖蒲を飾り」と語られるように、意東という特定の土地の習俗に基づくものであった。島根県を含め、五月五日の周辺で家に菖蒲を葺き、それを「女の家」と称した民俗があった。それは、田植の主な担い手であった女性の「祝ひ月」としての神聖な時間だったのである。

また、本譚における女房が亡くなることも、田植月と女性の死との関連の中に捉えることができる。意東川水源も近くの「大江」や「稚児が池」という水辺との縁をもつ女は、田園の広がる下意東の地に倒れ、葬られる。田植月における女性の死は、水の神としての女性と田の神の婚姻の、神話的表現といえる。殿様の妻となるほどの美しい女が意東の土地の供犠として捧げられる物語により、田園としての意東はその豊穡を約束されたのである。

本譚を4つの要素に分ければ次のようになる。

- (1) 女（水の神）の水辺からの誕生
- (2) 男と女（水の神）との婚姻
- (3) 都往復と婚姻破綻
- (4) 女の死（田の神と水の神の結合）

嫁ヶ淵伝説（1）（2）を基本に、女性の死を導き（4）、そこに菖蒲を関連づけるために絵姿女房譚（3）が挿入された構成と考えることができる。

しかし、女房の死と菖蒲との関連を物語るのに、都のエピソードは必然ではないのではないか。飛騨の嫁ヶ淵の例のように、女房の死は嫁ヶ淵の伝説の中で語られるのが自然であり、そこに菖蒲との関連を語るのは難しいことではなかっただろう。

絵姿女房は、簡単にいえば、絵を媒介とした夫婦の都・殿様との交渉の物語である。本譚と同様の筋をもつ、1節で挙げた〈物売型／婚姻破綻／伝説〉

をみれば、福島県郡山市の譚では朝廷に献上された長者の娘が采女となり、山口県室津半島の譚では満能長者の娘と用明天皇との関わりが示される。これらの地は、いずれも歴史的にも都との関わりを有した。

安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を吾が思はなくに

右の歌、伝へて云はく、葛城王、陸奥国に遣はされける時に、国司の祇承、緩怠なること異甚だし。ここに王の意悦びずして、怒りの色面に顕れぬ。飲饌いんざんを設けたれど、肯へて宴楽せず。ここに前の采女あり、風流みやびたる娘子なり。左手に觴さかづきを捧げ、右手に水を持ち、王の膝を撃ちて、この歌を詠む。すなはち王の意解け悦びて、楽飲ひねもすすること終日なり、といふ。（『万葉集』巻16・3807）

安積山の歌の左注には、葛城王（橘諸兄とされる）と陸奥国の采女との交渉の話が記される。葛城王が実際に陸奥国に派遣されたかどうかを確かめる術は他にないが、『続日本紀』（養老6年閏4月）には陸奥国から采女が献上されていたことが記される。

また、中世に至り寺社が瀬戸内沿岸部に荘園を形成した中、山口県の室津半島（熊毛郡上関町）もまた賀茂別雷神社の荘園となった。賀茂社領として文献に記されるのは12世紀からであり、海上交通の要衝として発達した港町である<sup>20)</sup>。

賀茂別雷神社と並び賀茂御祖神社も同様に、琵琶湖岸や瀬戸内周辺に漁場開拓し、御厨を定め供祭人に魚を貢進させた。それは山陰にも及び、意東もまた中世には賀茂御祖神社領として荘園支配を受けた。

伝説とは土地の固有の結びつきをもつ。こうした歴史的な都との関わりを記憶として、本譚において絵姿女房の話型が用いられたのではないか。『東出雲町夜話』では、「頃はいつの頃だっただろうか、話のなかに京都の将軍家という名がでてくことから考えると、室町幕府が京都にあった頃だと思われる」と語り手が推測を加えるが、こうした都との直接的な結びつきをもった時代であること、また前節

でみた「六日の菖蒲」の表現を鑑みれば、やはり本譚の成立は中世頃と考えられる。

本譚は、「嫁ヶ淵」を主題として、「六日の菖蒲」の表現と、五月六日に菖蒲を飾る意東の習俗、および都との交渉をもつ歴史が結びつき、複層的に形成された伝説と考えられる。菖蒲は、水辺にしなやかに生い、初夏に花穂をつける。大江の菖蒲とは、本譚の主題の象徴だったといえるだろう。



美人塚 (松江市東出雲町)

#### 【引用文献】

テキストの引用は、古事記・万葉集・風土記・大和物語・蜻蛉日記・平家物語・女殺油地獄・本朝二十不孝・世間胸算用については『新編日本古典文学全集』(小学館)を用いた。また続日本紀は『新日本古典文学大系』(岩波書店)を用いた。

- 1) 島根県教育委員会『島根県口碑伝説集』(伊藤辰太郎話) 1927年
- 2) 伊藤菊之輔『意東村誌』1948年
- 3) 吉儀茂・門脇朝吉・吉儀幸吉・周藤国実『東出雲町夜話』「美人塚一意東に伝わる五輪さんの悲話」(吉儀幸吉話) 1971年

- 4) 『東出雲町誌』(吉儀幸吉稿) 1978年
- 5) 野村純一編『別冊国文学 昔話・伝説必携』「絵姿女房(飯島吉晴)」學燈社 1991年2月
- 6) 『関敬吾著作集 第2巻』「絵姿女房」同朋社 1982年
- 7) 吉田東伍『増補大日本地名辞書 第3巻』富山房 1970年
- 8) 『日本歴史地名大系33 島根県』平凡社 2001年
- 9) 『東出雲町誌』(前掲書)
- 10) 関敬吾『日本昔話大成 第2巻 本格昔話一』角川書店 1978年
- 11) 『関敬吾著作集 第2巻』(前掲書)
- 12) 『関敬吾著作集 第2巻』(前掲書)
- 13) 『定本柳田国男集 第8巻』「桃太郎の誕生」筑摩書房 1980年
- 14) 中村裕一『中国古代の年中行事 第二冊 夏』汲古書院 2009年
- 15) 守屋美都雄他『荆楚歳時記』平凡社 1978年
- 16) 土井忠夫他編『邦訳日葡辞書』岩波書店 1980年
- 17) J.C.ヘボン『和英語林集成』講談社学術文庫 1980年
- 18) 鎌田久子「日本巫女史の一節(その二)一年中行事の司祭者として一」『日本常民文化紀要』第3輯 1977年2月
- 19) 上村木曾右衛門満義『飛騨国中案内』住伊書院 1917年
- 20) 谷沢明「瀬戸内の港町」『海と列島文化9 瀬戸内の海人文化』小学館 1991年

(受稿 平成28年5月12日, 受理 平成28年6月23日)